

【4】反省と今後の課題

本研究が、子どもたちの変化を「できるーできない」の指標で捉えるのではなく、「内面的な心の豊かさや広がり」と捉えようとしたため、その尺度や評価はとても難しい。小学部で培おうとした力は、即時的に効果として表れるというより、人格形成の基礎として本人の根底に流れ、高等部や成人になったときに、豊かな実を結ぶということもあるだろう。とはいえ、私たちの一つの研究の区切りとして、次のような観点でこの研究の取り組みを振り返ってみたい。

○子どもサイドから

- ・学校を楽しみにし、(ア) いきいきと生活する子どもたちの姿が多く見られる。
- ・学校でしたことを、(イ) 家庭でやってみようとする姿が見られる。

○教師サイドから

(ア) (イ) については、次ページに具体例を挙げる。

- ・発達の観点で子どもたちを見つめる目が育ちつつある。
- ・子どもたちの気持ちを理解し、よき支援者でありたいという姿勢で対応できた。
- ・子どものことや授業のことを語る機会が増え、学部全員で子どもたちの少しの変化でも互いに喜び合えるようになり、チームワークが増した。
- ・おもしろい、遊び心たっぷりの授業展開を工夫し、共に楽しむ教師の姿が見られる。

○個別の指導計画について

- ・個別の指導計画を広げ、関係者でその子の発達や対応について語り合えることができ、独りよがりの指導法に陥らず、皆で共通の理解のもとに育てていけるよさがある。
- ・作っていく段階においても、途中経過や評価においても保護者と十分な議論を重ねたとはいえない。しかし、初めは教師依存であった保護者の姿が、徐々に積極的な姿勢に変わっていった。何でも言い合える信頼関係づくりが、保護者との連携の基本であると感じ、今後も努力したい。

○授業づくりについて

- ・様々な実態を含む子どもたちを対象に合同学習を組む場合、個別の指導計画の活用には、特に難しさを感じる。授業実践において的確な支援ができたのか、客観的な評価と分析が十分にできたとはいえない。今後も授業分析と改善策の模索に努めたい。
- ・個別の指導計画に照らし合わせ、担任同士が子どもたち一人ひとりの目標を確認し、支援の方法を検討し合うことで、授業が一段と変わっていく。教師同士が語り合うことが授業づくりの第一歩であると思う。
- ・教科の関連性を意識しながら、子どもたちの意欲を引き出し、発達にそった支援をしていこうとした小学部の生活単元の試みは、実際にはその縦糸と横糸のからみが難しく、まだまだ課題が残る。教科の知識や技能を求めていきたい比較的発達段階の高い児童においては、1日の生活のどこかで、生活単元学習と関連づけながら個別の学習ができる時間を確保したい。
- ・子どもたちの充実感あふれるいきいきとした顔を見た時、発達に裏付けされた支援ができた時、私たちは「発達」を学び、この研究をやってよかったと感じる。
- ・「楽しさ」にあふれた授業においてこそ、子どもたちは達成感・自己有能感を感じることができ、それは、さらなる意欲や発達を促すことにも通じると考える。

○子どもたちの「楽しむ姿」の考察

私たちが求めた質の高い「楽しむ姿」は、本当に子どもたちの中に見られたのだろうか。以下2人の児童について、具体的に考察してみたい。

先生、学校大好き！ ～自信に満ち、いきいきと生活するようになった、ただし君～

ただし君は、今年度入学した小学部1年生である。ことばは豊かで、発達検査では5歳台を示し、「自己客観視の芽生え」の時期に該当する。できない自分がよくわかり、苦手な活動には引っ込み思案になる。絵を描くこと、発表会の練習、自転車あそびなどには保育園でもかなりの抵抗があった。そのようなただし君に、11月の生活単元学習「附養ふれあいまつり」の劇づくりにおいて、次のような取り組みを行った。

「楽しめる」ように	支援
<ul style="list-style-type: none"> ・ 苦手意識をもたず、喜んで取り組めるように。 ・ 安心感をもって取り組み、自信につながるように。 ・ 「やったー、できた」のために。 ・ 思い切り活動でき、自信がつくよう ・ 共感し合えるように。役に立つ自分、大きくなった自分に気づくように。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 劇の練習とせず、ステージの上でごっこ遊びをするという設定にする。 ・ ただし君が出る場面は、ずっこけがおもしろいという設定にし、同じグループの人はよくずっこける。 ・ 台詞は、勢いで簡単に言えるものに。 ・ 何度も繰り返して劇遊びをする。 ・ 学部やクラスの人と一緒に当日のビデオを見て共感し合い、ほめる。



消防士を演じるただし君

この学習を終えたただし君は、のびのびとした絵を自分から描き、学校生活全般においても、とてもいきいきと自信あふれる態度が見られるようになった。自分づくりに裏付けされた大事な支援を盛り込みながら劇づくりをしたことで、ただし君はしっかり楽しむことができ、自尊感情も満たすことができたと思う。

ただし君は、おどおどしたところが減り、毎日学校を楽しみにやって来ている。

おうちでも、もっと！もっと！ ～学校で楽しんだことを家庭に広げるかずや君～

かずや君は小学部2年生。生活経験や遊びの幅が狭く、いろいろなことに挑戦して経験を広げ、豊かな発達を促したいと思っている。発達段階では2歳台前半に当たり、イメージを膨らませる「みたて・つもり」の活動を大事にしたい時期である。学校では何度も繰り返し劇あそびをし、当日かずや君はいきいきとアナウンサーの役を演じることができた。「ふれあいまつり」は大成功に終わり、かずや君は家族や先生たちからほめられ、「楽しさ」も満足感・達成感、自己有能感も味わうことができた。

学校ではこの単元は終了したが、かずや君はその後も教師の手づくりの絵本を開き、家の中で一人何役もしながらごっこ遊びを楽しんでいる。繰り返しいメージ化をして心に刻む経験は、この時期の子どもたちにとっても必要であり、3歳につなげるステップとしても重要な意味をもつといわれている。この単元で味わった「楽しさ」は、きっとかずや君の次のステップへの足がかりとなるであろう。

(小坂祥子)